

の是を改め、花實備れりといへど、猶大かた新古今に同じうして、いにしへの姿にあらす。續後撰千載新勅撰此集を合て二條家の三代集といへりの後拾遺のおもかけをまなべり。たゞ風雅玉葉のふたつ、異躰にしてよからずとす。これそれの集毎の姿の、大かたをいふにて、委しくいはんに、そのよしとす。する集にもよからぬもあるべし。又わろしといふ中にも、すぐれたるさまもまじるべし。かの後拾遺の、みだりに人の歌を改め、又たま／＼あるき歌もとり入れられたれ、よからぬよしその頃の人のいはれけれど、又よき歌もあまたあれば、清輔朝臣の此集を殊によしといひ置かれたり。さていづれの集をも捨つべからずといへど、まづ歌の姿にての三代集より、千載集までにまきのあし。是の爲重卿の俊成卿より初めつ方の歌こそ本意にてあれ。近來の様に下れりとのたまひ、又頼阿法師の、何として昔の上手

もみく／＼珍らし
き詞にこそ

の歌の、今の堪能にもまさるべしといへるの、續後撰より前をおしあべていへる詞から、新古今、新勅撰の古のさまに異なる事は、初めにもいへるか如く、又詠歌一躰の中にも、新古今ばかりおもしろき集のあしといへど、またしき人にもよからず。心えたらん人の見るに、いか／＼わしかるべきともわれ、今千載までの姿を、よしと定むるあり。まかのみならす後の集の、此文のはじめにもあぐる如く、文字あまり、またのかんあのみたりか、しきにて、よからざるを、まへし。俊頼朝臣の、又あき上手にて、うるのしくたけあるやうにも、殊に多くみゆ。又もみく／＼と人のえよみはてぬるにもあり。これかんだ家卿のまねひ給ひける所ありけるとす。へて此卿才のすくれたる、さしもしみしかりし父の卿の歌をだにも、あさ／＼と思ひ給ひける上、まいてあべての人をや。やさしくもみく／＼とある

壬生二品の家隆卿あり

やうにみゆるまことに有かたき歌の事なれどもよみ口の心に任せたるも壬生二品などのたち並ふへきにあらす。大よそ此卿二品一生の間姿さきに似す後に似す。姿いひえらす珍らかよしてはねたるふしくの思ひかけずそめきたるを進みものし給ふ。これ後拾遺姿のふりたるをよみ困じて改められたるにより人々詞の巧あるをむねと挑みあひ給ふ。されど二品の歌を人のもてはやしけるの猶姿のさだらかあるをよしとせしをみるにたれり。又後京極攝政も殊よしあるさまあれどあまりに地歌のすくあかりしをかへりて難といひ寂蓮法師雅經卿女房にては宮内卿皆あはざりの歌よみあられどあまりにいたくぬりくたさしほどにたけ高からさしをわかぬ事にいひけるも姿異なる中にもすあはせるをよしとすれりあり。爲家卿にいたりてまたして中頃の姿にたちか

地歌のつれづれを云

へり近昔のさとり少くありにたり。常盤井相國頼阿にはかりて此掟をとりたて給ひけるより後伏見院萩原院の御時、まばらくけしきあるをよろこび姿詞をいたのらすよめるといへど、いくほどもあくやみぬ。此ほかの皆中頃の姿にかさる事あり。今の世にいたりて人丸定家卿家隆卿の歌かはる事ありといへり。この何の見る所ありて、かくいふらん。二三の則に載する如く、心とへ事がら姿の三つのかとれり。たゞ三十一字ばかりぞ同じかるへきをまひて同じとするまことに天地のわかれも知らずと云へし。さる人の猶いへらく昔の如くするくまよまん事かたし。今のこまかある歌をもととし、道隆院三光院の御歌をみるへしといへり。この掟の基つく所をはかるに、今の歌よみ、大方銅馳坊の流をくむによれり。すへて京極黄門の人をみちひき給ひける詞は、大方三品より傳えれ

る御おきて、又の古き世の法にして、つゆまがれる事なし。たし歌の姿にいたりて、時のこのみ免かれかたく、詞をむねどはたらかせて、これかんな花山僧正、在原中將、素性法師、小町が後にたゞざる歌のさまあると、事よくのたまふのみを、少しうけられぬ。爲家卿ひそかに是をさとりて、よみかへ給ふと、いへど、その理さたかにも、給ひ置かざる、父卿の御上にあつかるをもて、止事なくおぼゆき給ふにこそづけて、たどりあきともから、猶近昔の細にして、巧なるを、古の姿ありとも、又昔の歌の時代わかりて、今の事にかあひがたしともいへり。げにさる理あきにあらねど、近き代にても、基俊朝臣、俊頼朝臣、俊成卿あどの古き姿を好み給ひ、上手のきこえあり。まかれは猶願ふへきの、古き姿にこそあめれ。此頃の歌とて、詞ばかりかざりて、させる事なきあり、歌のあがめて、まめくくと聞ゆるをよしと

す。歌をみて、姿事からを見んに、古き歌をよみくらべてみるへし。いかにもけあかり明かに聞ゆるのよき也と、爲家卿もの給へり。此御おきてにても、又中昔より後名高き歌のまれあるにても、をどの世の後の姿、よからぬ事をみるにたれり。まかのみあらず。姿のよきよからぬをいへるに、理更によりどころあり。かの歌の字をうたとよむの、物にしていふ詞なり。歌よみすとよみ、うたとよむの、どにもにわざをいふ詞あり。古へのふるくあたらしきをいはず。歌といへり。皆うたふ事にて有けり。神代にして、岩戸の前にて、天の鈿女の命わざをぎしてうたひ、又日の御神いは、戸よりいでまましとき、もろくの神たちのあはれあおもしろと、うたひ給ひけるよりみえて、人の世にては、神武のみかど、猫ねこにかちて、菟田うたのたかきにと、謠はせ給ふを初にして、おほやけにもわたくしにももてはやし、うたひ

ひろされることゝもろくゝの古記にも撰集にもちりばひて
 みえたり。又神樂催馬樂あどをうたひし事の常の事にそわり
 ける。やうく中頃の未までも大山の別當の筑紫にてよめる
 時鳥の歌を京にのほるとて山崎をすくるに確ひくものゝう
 たひ鏡の傀儡ふけ殿にまゐりて俊頼朝臣の我身にそへる影
 といふ歌をうたひけり。永縁僧正これを羨みて琵琶法師に物
 とらせきとして我よめるいづも初音のこゝちこそすれとい
 ふ歌をこゝかしてにてうたはせ。又敦頼人道のめくらどもに
 うたへくゝとせめけるも同じすき心のくるさなりけり。とそ
 又俊恵法師その頃の歌披講のさまをいへる。高く詠するよき
 事と頸筋すぢをいらかし。聲をはりわけたりとみゆ。かく代々
 にうたふ事をむねとして。姿詞をえらべるも聲のあやにつき
 て。歌の節にも衰にも聞ゆれり也。されり俊成卿も歌の聲につ

いづもはつれの
 云々金葉集夏部
 出たる聞きたひ
 にめつらしけれ
 の郭公いづし初
 音の心地こそす
 れさある歌ふり

きてよくもわろくも聞ゆとのたまへるも其頃既にうたふ事
 まれにして歌よみの是を忘れんとするをもて。まかの給へる
 なるへし。されども又とりたてゝいふ人もあかりしを頼阿の
 井蛙抄に。此御詞をのせられける。これに心のつきけるにやあ
 りけむ。近頃のひとくゝの姿詞さまに似す。あだらかあかりたれ
 と。誠にうたふ事もあければ。又程あくるつるひぬ。神樂催馬樂
 にもうたふへき譜の残りたる。かたくゝにつたはり。歌垣の中
 むも。かたはらこれをつかさとれるもあれど。又世に用ひら
 るゝ事もなく。たゞやんどあき歌の御會に。今も披講の御
 けしき残れると。出雲の神の御祭に。あけの毛衣といふ歌を
 折返しうたふばかりぞ。古の浪残なりける。是らの外に。全く
 あどをけづれる世あられ。人たゝ文字のうへにして。歌のよき
 わろきを定めて。聲につきてこれをいひざれり。あるり姿詞の

さいくの細なるを巧かりとし、あるの耳遠く恐しきをどほじ
 るしと思へり。是ものふの事もまらて、戦の勝負を書の上に
 して説けるよりも、うとくしくあるしき事にあむ。大よそ
 歌の詞すくさきをよしと、俊成卿、定家卿のたまひけるも、あた
 らかにいひ下し、清けならん事を求むるにて、すあち文字す
 くさなるの、謠ひもまたるに、優に聞ゆる故なり。されのとて姿
 のみをいたはり、心さもなきもいとわるかるへし。御口傳に、黄
 門の秋とたに吹あへぬ風の色かゝる生田のもりの露の下く
 さといふ歌、最勝四天王院の名所の障子の歌に入すとて、所々
 にしてあざけり給ふとぞ。秋とだにと打いづるより、吹あへぬ
 風に色かゝるとつゝ、け露の下卿とかける事、上下よくかち
 ひたれど、此歌よくくみるへし。詞のやさしく艶ある外、面
 影もいたくなきあり。森の下にすこしかれたる草のあるは

かりにて、けしきも理もあけれども、いひあがしたる事がらの
 いみじきありとぞ。これこそ貫之君の、あき人のよき衣着たり
 とのたまへるも、これらの事なるへし。さて俊成卿の、世々のお
 きてをよくまほり、姿いひまらすあたらかによみ給へとい、そ
 ろある趣のすこしともしかりき。定家卿もさる教にまたかひ
 給ふによりて、風情すくさく侍るにや。又西行法師の、そゝるあ
 る風情をふつくとよみ流したるさま、古の人の口つきに似
 たりといへど、姿詞など、正しからざる所はのく見ゆめる。吉
 水僧正此姿をねかひ給ふ故にや、そゝるきたる姿多し。昔より
 師にひきこしたらむと思ふに、多くの劣りさまにかやすしと
 いへり。まいて拙きを師とせん、いかにつたあ成るへき。され
 の師のよきか上にもよきを擇むへき也。今のすくれたる人も
 かたき世おれ、たい中昔の人々を師として、假にも今の卑し

思ひきや云々古
今集雜下に載た
る歌なり

きさまをまねふへからず。たゞ詞のもじすくあまして艶ある
か、又清らあるをつよくさりて、姿のすきはにして、あたらか
らん事を求むへし。姿かくたにあらん、此のりをもどける輩も
よもこれを捨てじ。さのよしとする所にいたりて、古今とも
に同じけれのあり。但し初の文字にて打合たる歌、今の世に多
くみゆれど、あまりこのまさる姿あり。さるの古今集を見るに
小野篁參議の、思ひきや鄙のわかれにおとろへて、蟹のあまた
ぎいさりせんと、いよめるのみそある。思ひきやといふ、も
とよりはしめにいひいたすへきはどの詞にして、鄙の別とい
ふより、いさりせむといひ捨てたる心の、おのれと上よか
へりて、優に聞ゆるあり。もし下にいひ出したる詞と、上にうち
あひたる詞と、かけあはさる時の、上の句くだけて聞ゆへし。さ
れの此姿のよみかたきをもて、古にまれあるあるへし。今

あけのまた云々
新古今集旅部に
出たり
明わたるの歌の
新勅撰冬部にあ
り

思ひくま云々の
歌の千載秋上
にあり
春霞の歌の古今
秋上よ出てよみ
入しらすあり

の人の唯姿のよきわろさを知らぬ、とにもかくにもいひは
てむ事をのみ謀りて、下のさだからかあるの上もさだからに、ふ
とさのふとく、優あるのいうにいひつむる事をえらす。たゞ下
のあまり猶多きを、上にてわりなく事をつめていひつむる
故に、いちいりて聞ゆる歌多し。いと見苦しきわさあり。これ
四則にいへる、初の五文字に、力を入れず、すよりのあやまち
あるへし。

あけのまた云々山の峰あれや空ゆく月の末の白雲 家隆

明わたる雲間の星の光まで山のとさむし峯のえら雪 同

此卿の歌の、下句つよしといへり。又、

思ひ隈あくても年の経ぬる哉物言かはせ秋の夜の月 俊頼

春霞かすみていにし雁がねの今ぞ鳴ある秋霧の上に

此歌の姿さだからかなりといへり。これらの下にてあるへし。

淺緑云々の歌
下十首皆僧正
遷昭の歌なり

淺緑いとよりかけてまら露を玉にもぬける春の柳か
 蓮葉の濁にまぬ心もてかにかの露を玉とあさむく
 名にめでゝをれる斗そ女郎花我落にさと人に語るな
 よそに見て歸らむ人に藤の花這纏はれよ枝の折とも
 里の荒て人の舊にし宿されや庭も籬も秋の野らある
 佗人のわきて立よるこの本の頼む蔭さく紅葉散けり
 千早振神のさりけむつくからに千年の坂も越ぬべら也
 夕暮の籬の山と見えさゝむ夜の越じと宿りどるべく
 我宿の路もあさまて荒にけりつれなき人を待とせしまに
 今こむとて別れし朝より思ひくらしの音をのみぞ鳴く
 已上同 皆人の花の衣にありぬあり昔の袂よかわさだにせよ
 これの花山僧正の歌あり貫之君の姿を得たりとする所あり
 これらを見て姿のよさをまゐるへし。集中猶多し

原ふけい云々の
古今集下
よみ人しらす
津の國の歌
古今集諸部
ある伊勢の御
歌にて初句な
はふるさあり
こひせしこの歌
も古今集戀一に
よみ人まらすさ
て載せたり

世の中をの歌ハ
もさの万葉集
るな少しひき直
して拾遺集にの
せたり
天の原の歌三月
やあらぬの歌及
我宿の歌ハ共
に古今集あり
思ひかぬの歌ハ
ふれいの歌ハ拾
遺冬部に見る

六則

かせふけの沖つまら波たつた山よはにや君がひとり
 こゆらむと云歌貫之が歌の中の本体とすへしとのたまひ又
 津の國の長柄の橋もつくるあり今のわか身を何にたどへむ
 と云歌を伊勢の御が中務の君にかやうに歌のよめと教へ戀
 せじとみたらし河にせし御禊神のうけすそなりにけらしも
 といふを深養父が元輔にかやうによむへしといひその外
 世の中を何にたどへん朝ばらけ漕ゆく舟の跡の白波 曼沙彌
 天の原振さけ見れり春日ある三笠の山に出し月かも 仲麿
 月やあらぬ春や昔の春さらぬ我身一の本の身にして 業平
 思ひかね妹がりゆけば冬の夜の河風寒み千鳥鳴なり 貫之
 我宿の花見がてらに來人の散かん後を戀しかるへき 躬恒
 數ふれの我身に積る年月を送りむかふと何急くらむ 兼盛
 これら皆昔より人々の名歌といへる所にて、近き世までも本

則ちりどもいへり。これの古今集の序に、在原中將喜撰法師の歌の趣をとけるをよからすとのたまふやうに心得、且貫之君の心くまなく、姿あはしくしき歌多かるを見て、かく定めおかれけるにや。まかれども貫之君の古今集におけるの、猶定家卿の新古今に同じく、むねと撰み給ふといへど、人々の好みにひかれ給ふ事も有へし。序とてもまかあり。ざるを貫之君ひとりの心さしよりおれるといふへきや。又私に新撰をえらみ給へるに、古今集の歌、わづかに三百餘首を入れられけるにても、又風ふけの沖つまら波の歌をのりとせよとの給ふにても、又みづから思ひかね、むすふ手のあとの歌のあるを合せて見る時の心あまりあると、幽玄の趣とを捨て給とさるに同じ。又爲世卿もよからぬとのたまふにあらす。たゞまたしき人の、まねひかたしとの給ふを、やかたえてよからすといひます。

櫻ちる云々拾遺集にある歌よてさくちる木の下風はさむからて空にまられぬ雪を降けることあり
わの宿の云々古今集卷上のうたなり

事いとわりなし。此おきて初れるよりこのかた、餘情幽玄をととさふる人あし。さのよみかあふへくもあらずとして、思ひ捨つるあるへけれの、今の歌の昔に劣れるも、理とこそおぼゆれ。歌つくらん人の、さても有ぬへし。歌よまむ人の、此のりをわする、の鳥の翼を失ふか如く、鳥あらざるにあらねど、其業のえもあさむや。いはゆる心ありとの、心あまりありと云に同じく、詞いひさらさる中に、かくれたる旨をさして心と云也。頓阿法師云、風雲草木の感につれても、又世間の盛衰につけても思ひ入たる、心あるとの申す也。故戸部申されし、貫之が櫻ちるこのまら風、歌、風情おもしろくめでたけれども、是を心ある歌との申さす。遍昭が鳥羽玉のわが黒髪、歌を、心あるの本との申されきとあり。又餘情といへるもこれあるへし。

我宿の花見がてらに來人の散あひ後を戀しかるへき 躬恒

今こむと云々
し同集四よあ

今こむと言しばかりに長月の有明の月を待出つる哉 素性
これの忠岑の十脉にいふ餘情体あり。

音羽河の歌こし
同集雜上にあり

思ひかね妹がりゆけ冬の夜の川風寒み千鳥鳴あり 貫之

わたの原の歌こし
古今集雜上にあり

音羽河堰入れて落す瀧つせに人の心のみえもする哉 伊勢

わたの原八十嶋かけて漕出ぬと人に告よ置の釣舟 小野篁

これの道濟の十脉の中にいふ餘情の姿をいへり。古の切に思
ひ入れたる心の詞の外にあまりあるをいふ。今深くおはれ
ある事あらざるも、いひのこしたる心あるをいへり。いは詞
の巧にて心をいひつくさすして、まかもそれとさこえさする
あり。

五百番 秋あさき日蔭に夏に残れともくる、籬さの萩の上風 信之

千五百番 時雨にの色も變らぬ高砂の尾への松に秋風を吹く 有家

此二首餘情ありと判せられたる歌あり。

ふりそむるの歌
新古今全部に出

降りそむる今朝だに人の待れつるみ山の里の雪の夕暮 寂蓮

いかにせん歌
も同集支那に載

いかにせむこぬよ敷多の郭公待じと思へば村雨の空 家隆

せたり

これらも同じかるへし。かの黄門の歌を心深しといへる。

かへるさの云々
新古今集三よ出

歸るさの物とや人の詠むらん待夜ながらの有明の月

これ又皆おかしかるへし。但爲世卿の、定家の歌を心ふかしと
の給へるの、又これに異あり。人のえもいひはてぬ旨むつかし
きをもみくくとよめる。うちつけに何ともたどりがたきをも
て、心ふかしといへり。

忘れきむ待と告をなか／＼に因幡の山の峯の秋風

忘れか白菊の
二首拾遺集
草の中にある歌
あり

白菊のちらぬの残る色かほに春の風をも恨みつる哉

これらに心あまりありといふへからず。さて幽玄の詞の、古
曾都入道のみ見出たる趣にて、姿の外に、けしきのうかひて見
ゆるをいふ。俊恵法師の、よき歌の、織物の浮紋のごとく、景氣の

外に浮ひて見ゆるありともいひ、又五尺の菖蒲に、水かけたらんが如しともいへり。俊成卿の詠にも、玄たるに、艶にも幽玄にも、きこゆる事のありて、景氣のうかびたる事のあるを云どのたまへり。これら皆能因法師の幽玄にひとしく、いはゆる心あまりあるといふのちりあるへし。古もかゝる歌多しといへども、中頃より末のよき歌といふ、皆此趣をさしはさめり。すかはち詩の作法に含蓄といひ、唐の王摩詰が、詩中有畫かといふも、これに同じかるへし。鴨長明のいへらく、幽玄の詞もあらはれ。姿にみえぬ景氣あるへし。心にも詞にも、えんきはまりぬれば、これらの徳か、のづからそあはるとぞ。たとへば秋の夕くれのけしき、色もあく聲もあし、いづくにかある故あるへし。ともおぼえねど、すいろよ涙のこぼるゝが如し。又よき女の、うらめしき事あれど、詞にあらはさす。ふかく玄のびたるけし

きを、さよあどほのゝ見つけたるの、詞をつくして怨み、袖を玄ぼりて見せんよりも、心ぐるしう、哀もふかゝるへきが如し。又幼きものゝ片言したる、それとも聞えぬを、いどほしく聞どころあるに似たり。一詞におほくの理をこめ、あらはさすしてふかき心さしをつくし、卑しさをかりて優あるをあらとし、おろかなるやうにてたへある理を極むればこそ、心も及ばず、詞もたえぬ時、これにて思ひをのべ、おづかに三十一字が中に、天地をうごかす徳をそあへ、鬼神をそこむるわざにて侍れといへり。此詞よく幽玄の趣をさとし、かつ心あまりあるといへるにも、かよひてあるへきをしへあり。今の入歌をよむを、せうそこまをかくやうに心得、くたゝしくいひあらはす。かるがゆゑに心もかるゝしく、詞もさいくみ、姿も卑しくあるあり。はしめの則にいへるか如く、歌の心さしをのふるをもとゝし、

世をうち山云々
古今集雑下に出
たる喜撰法師の
歌なり

かつうたふを詮とする物されぬ何事もひきかくしてたい心
さしをのみはのくどあらはすへし。夫もろこしの神聖とす
る孔子などの道ををしふるあるの無違あるの克色あるの思
無邪きとむねふかきことをとすくきにいひおしたる旨
どほしろくよろづのこともかなひていよくたふとく又
台宗に開證禪師の文字法師をきらへるも同じ心もちひあり
つねの物いひさへことすくななるの心深うあつかしく聞ゆ
るをまして歌うたふ物されぬ消息などやうにさこりさく
いひはつへけんやいひさらすしてまかも理たしかあるやう
にこそあらまほしけれたいしえいはさるにのあらさるへし
昔の我身ひとつのもとの身にしてと云も今あらぬもとの身
そかし又のもとの身なるをさといひさるへし。又世をうち山
と人のいふなりとよめるも今あらぬ人のいへともとよむへ

明ぬるの歌後
拾遺秋上にのせ
たり

し。又明ぬるか河瀬の霧のたえくにをちかた人の袖の見ゆ
るの四、経信母とあるを今あらぬ袖を見えゆくとそよまし
さるの心もたかひ詞もつまりてよからぬを深くも思をてた
い今の耳に聞にくしとて心の外ある事をもよむ無下のこと
也。わづかに中比の末まで、五條三品の夕されば野への秋風
身にまみてと云をある人難して身にまみてと打出さすのい
かにめてたからむといひけるとかやいひさらさるのうとふ
にもよく又餘情もありてめでたきをまゐるへし。

山深みの歌
集各部にのせて
あり

山深み落ちて積れるもみぢ葉の乾ける上に時雨降あり 嘉言
これの長能の能國に歌のかやうによめといへる歌あり

さ、波や志賀の山越する人を思ひやらるゝ花櫻かき 能因
此歌をそしりけれぬ能因のいへらく故部の長能寺かやうに
よめとありつるよしをいへる歌あり。

心あらしむ人に見せばや津の國の難たりの春の景色を
津の國の難波の春の夢なれや葦の若葉をこゆる白波

山寺の春の夕暮来てみれり入相の鐘に花をちりける
都を霞とよみに出しかと秋風をふく白河の關

これら皆能因が入選の歌なれり證のためこゝに出す。

鶉あぐ眞野の入江の濱風に尾花なみよる秋の夕暮
古里の散もみぢ葉に埋もれて軒のまのふに秋風を吹

此二首順阿法師幽玄におもかけかすかにさひしきやうなり
といへり。

人ならぬ岩木も更に悲しきみつの小嶋の秋の夕暮 順徳院御製
判に此卅一字又毎字難押感涙候、玄之玄最上候歟とあり。これ
らにて考へ見るに、幽玄の面かけかすかに、さひしくわはれな
るさまをのみいへり。又近來風体抄に、順阿法師歌の、かゝり幽

玄に、姿あたらかに、ことくしからで、まかも歌毎に、一かどめ
づらしく、當座の感もありしとかけり。これのたゞ、その頃の歌
の中で、かくみえけれのまかいへるにて、能因の幽玄に、同
しからず。

六運 五体

六運の神代より今の世までには、歌の姿詞の移りゆくさまを
さとし、五体は、中昔を初とすといへども、大方の中頃近昔の
はゞをもととす。其頃より後の、ありとある歌毎に、此五つの
体が出る事なし。されは此二つのこと、古き歌をみんにも、又
みづからよみ出んにも、おのつからざるすぢく、わかまへ
られて、心のゆくへ定まり、思の限の見ゆるそかし、ことごと
によく見知りて後ぞ、此すぢくを心え心得ざらん人の思
ひを助け助けざらんけぢめ、思ひまらるへき。

六運

かみつ世 開闢より、光仁天皇の御世迄を、かしをへて
上つ世とす。

中むかし この後より、花山院の御世まで、二百五年か

はとをいふ。

なかでろ この後より、後白河院の御世まで、百七十二

年の本とをいふ。

近むかし この後より、四條院の御世まで、八十四年か

はとをいふ。

をどの世 この後より、後花園院の御世まで、二百二十

二年をいふ。

いまの世 それより後を、すへて今の世とす。

五体

のとへ歌 よせ歌 むかへ歌

まもらへ歌 かさね歌

○六運辨

第一上世 歌のみ道の世の歌、今の世の

神代より光仁御時まで、年代あまたかゝり、歌又多く傳われり。こまかにみれば、そのうち數多度姿かれり。されど今六運をいふに、今もてあそふ歌の道、中昔を祖として定むる事あり。上つ世をと上つ世として、またらくさしかく故に、此間多くの内あまた姿分るゝ由にいふに及せず。万葉を學ん折に、上つ世にのみ目をつけて、此内さまゝかされるきとを見知るへし。今のえうにあらす。書に古事記、日本紀の歌、萬葉等あり。又風土記、諸古記にもちりばひていづ。猶中昔より後の書どもにも、まじりて入れる歌少からず。今又心えやすからんが爲に、さぞ毎に歌むつを出し、姿變りゆく様を知らしむ。此歌どもは、其世にすかれたりといふにもあらず。又其時にむねと有けん人のにも限らず。唯是を其きとの姿にして、異きに見まがふべくもあらぬを、擇ひて出す也。未皆此心得してみるへし。

紀 花細櫻のめでことめでりとやくい愛す我めづる子ら 允恭御製

紀後 今日の日の池のはどりに郭公たひらはちよと 平成御製

万 霜くもりすどにかあらしうと玉の夜渡る月の見えぬ思へと

同 我さどに大雪ふれり大原のふりにしさとに降らまくのち

同 古のをうきにしてやかくばかり戀にしつまたわらの如

古 宮人の大よすからにかさとほしゆきの宜しも大よすからに

第二中昔中むおかし十六代今の世の

あがりての世遙ある昔の何事につきても、照日とも願ひしく、高き山ども仰がまほしき中に、此きとぞ、今も耳遠からず、代々の歌人たちも、此時を本として、口をも開かれければ、返すくも目をつくへき、此きと也。そが中にも水の尾和の御時迄を初つ方といふへし。此時まで、詞の道深く翫ばせ給ひけんどもみえず。貫之花海穂に出すべくもどかさたるも、此あひだの

事をや思ひけん、其後より醍醐村上の御時迄をみ中とす、上より下までよみ人も多く、事がらかのづから美はしくと、のほりて、ほのかま今の法を備へ、あらに古のふりたるを改められたり、それより未好む人よむ人いやましに多く成ゆき言の葉更に繁かりけれど、み中よりいと、少し造りたる姿も見え初て、おのづから中頃の姿をとらみたれ、此程末の方といふへし。集にと古今、後撰、拾遺、菅家万葉、六帖等常に人のもてあやみぐさあり。又伊勢物語大和物語など求むるに事たりぬべし。

古 櫻花咲にけらしもあし引の山のかひよりみゆる白雲 貫 之
 後 郭公とつかあるねを聞初て有ぬもそれと覺めかれ筒 伊 勢
 拾 よにふれの物思ふとしもなけれ共月に幾度眺しつ覽 具平親王
 同 年ふれの越の白山老にけり多くの年の雪積りつゝ 忠 見
 古 陸奥の信夫もち摺誰故に乱れんと思ふ我ちあらあくに 河原左大臣

後 いと、しく過行方の戀しきに羨しくもかへる涙かな 業 平

第三中頃 中頃の心は十二代を、今の世の

一さこの内には、初め六代を本といひ、後六代を末と云ふも、六代中昔の名残有て、心深く詞ゆたかにして、實によき歌多かりける時也。中昔と取較へてみれば、花と錦の様にて、彼の誠しく是れめでたさ勝れたるが、自ら世變りてみゆ。後の六代ことに物明かに晴やかある姿に成果て、心に詞も滞りなく、理も姿も求むるに心たらひて、泉の湧くやうに、唯出来に突きけん頃をれと、後の人の打みて、あき恐ろしい、かある口つきにて、かう思ふ儘にも、詠出しけんともみゆる也。本末を合せて思ふにすべてあまりに心強く、詞明かあるが、中昔に遠くもてきて、此一さどちかれり、書には後拾遺、金葉、詞花續、詞花、堀川二度百首あり、猶家集なども多く傳われり。集歌合なども、此さどよりそ多く成ける

金 春雨にぬれてたづねん山櫻雲のかへしの嵐もどふく 源川右大臣

拾後 吾やどのかき根を過る時鳥いつれの里も同じうの花 元 慶

詞 月清み田中またてる假庵の影ばかりこそ曇なりけれ 新院御製

同 日暮しに山路の昨日時雨しは不土の高嶺の雪にそ有ける 大江嘉言

拾後 津國のこやとも人を言へきに隙こそ無れ芦の八重菅 泉式部

金 世中の我身に添る影なれや思ひ捨て離れさりけり 俊 頼

第四近昔近昔十代今の世の歌

一さと百年にもたらでよみひろげかきあつめられけんもか
ぎりなく多く姿もさきに似ずのちに似ずひとりだちたるを
思へば此きと壬生二品京極黄門の一生なれなるへしそが
うちにも千載集あどいやもせと中頃にもさしいれつへ
くやすらかあるを後鳥羽のみかどの好ませ給ひけん御姿は
かりそまたことに見えける心詞姿いひしらすめづらかなり

といふうちにもなほ思ひかけずめづらかなるふし〜あり
てよく境にいたりあんどおぼゆる歌はおろかに思ひたどら
れぬまでよみふせられたりさて千載集をくしくみればた
ま〜いたくすぐしたる歌の思ひかけすまじりたるを思へ
とまことに時のうつりかひりゆきてそ水無瀬の神の御心と
もありけむよみ人あまりに口さゝたるまゝに世々の姿をも
まねびよみ又の姿を作りてよみ合せなどせられければ五
かた下五に山山林林あども此きとよりあらにに見るべきやうになり
ぬ。それにつきていむねとある人々も千歌ひどうたひ三のく
ら三級下五に五い五つ五のにもよみとつれたるもかの〜みゆれど昔
よ成にけれとそれも今の法とありぬ集に千載新古今新勅
撰あどありくさ〜のふみ敷へあへず。

新 尋ねきて花に暮せる木間より待としもあき山のとの月 雅 經

同 郭公猶うとまれぬ心かおながき里のよその夕ぐれ 公 經
 千 出ぬより月見よとこそさえにけれ煥捨山の夕暮の空 隆 信
 勅 少女子か袖ふる雪の白砂に吉野の宮と訝ぬ日もなし 關白左大臣
 同 暮る夜ハ衛士の焚火をそれと見よ室の八嶋も都ならねハ 定 家
古新 ふる里に聞し嵐の聲も似すわすれぬ人をさやの中山 家 隆

第五をとつ世

文保以前のどじめあり。只近昔の歌の、うるのしくよみすゑて
 思ひかけぬふしすくなきより、よくなほりたれど、さすがに勢
 ひのうせぬ、伏見院御時よりして、まどらくけしきある姿をど
 りたて、よませ給ひけれハ、此御時玉葉いできたり。されどは
 せきくやみぬるを、萩原の御時に、又風雅をえらばせ給ひたる、
 かの姿に似たり。これもいくはせきくやみにき。其さま心を
 珍らかにして、姿詞をいたのらず、文字あまりがちにて、見る事

文保ハ花園天皇
の年號也

元應ハ後醍醐天皇
の年號也
永享ハ後花園天
皇の年號也

を繪にかきたらんやうによみ、思ふ事をい、た、ことにいひ續
 けたるやうによむあり。元應以後のみ中なり。いと全くうるの
 しくありて、わかぬ所なし。永享以後の末ありやうくうるの
 しさ劣りて、まひてもてつけたるふしもいできたり。凡此きと
 の繪にかける女の顔の色あひ、つらつき、まみ、髮際、眉びき、鼻筋
 あかぬ所あく、かゝんとてかきたるが如し。まことの人の顔の、
 それにのすこし劣りたるものいひうち笑ハ、多くまさり
 ぬべきを、これぞ、わかぬことなきうち、わかぬ事あるべき。集
 への續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新
 千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今、新葉等あり。

古撰 よしさらのちるまでのみせ山櫻はあゝの盛を俤にして 爲 家
千撰 わかつきの鳥の八聲に一聲を鳴そへて行く郭公かき 良 信
 玉 更ぬれと行共見えぬ月影のさすかに松の西に成ぬる 後二條

新 山深き住處あらすの庭の雪とはれぬ迄も跡や待れん 淨 辨
 後拾 更ぬるを恨んとたに思ふ間にこの夜知るゝ鳥の聲哉 頌 阿
 拾 吹風ものどけき花の都鳥治まれる代の事やととまし 少將内侍
 古 概

第六今の世

よき歌のをとつ世の姿をねがひれたりどみゆむねとある人
 々のまゝ近昔の姿をよみ似せらるゝやうあるも皆いかにぞ
 や。おのつから今ありくわしくわのおのれもこのうちにはらま
 れたればあしよしいひがたし。又いひ得べうもあらず。此うち
 におぼゆれど、これとてもさのみいはんもたやすきやうあれ
 り。おしきへて一きはと定む。但此うち元利以後、又一たひ体をなせるにやとわい
 ほゆれと、さのみいはんもたやすき様なれば、おし
 きへて一きは
 こゝろたむ

またじたい思ふに違ふあやにくの世の理に花やさかぬと 圓 淨
 誰か今見のこす夢も惜からん雨のまぐらの山ほどととます 爲 綱

曇あらしよの恨ぞと雲の上に君をいさめて月もすむらん 逍遙院

霜さやぎ蔽みたれし窓の竹よをへてみれぬゆきの下をれ 延寶御製

關の名の霞もつらしかへりみる昨日の空も今日の隔てゝ 通 茂

この六きはのうちにも、むねとありける人々のこと、わらひいたされけんふみのこと、哥あひせよみ
 かほしふこと、又これらならても、歌の事にあつかりたること、まもなへ、へちにかきあつめて、委しく
 まるさんの心さしあり。今いたればむねないふあり。

○五體辨

貫之か書ける古今序に、歌のさま六つありとて、そへ歌たどへ
 歌あすらへ歌かぞへ歌たゞこと歌いはひ歌のまあゝをわ
 げたり。彼序もどより、子夏が詩の序をこひねがひてかけれり。
 歌の六種も詩の六義に准らへて、強てわかつてり。さる故にみづ
 からも唐の歌にもかくぞ有へきこととわれゝと、風賦、比興、雅
 頌もどより詩の六体といふにあらず。べちに理ある事あるを、
 さしもいみじかりし貫之も、かの國の事にはいたり極められ

ざりければもとよりよしかく准らへたり。まひて設けたる事
 されは、この歌にも又かあふべくもあらねば、細註すでにこ
 れをもとせき、後の人もとりたて、いふ事もあし。今我いはゆる
 いつかたの歌の、かの六義にもあらず。貫之の六くさに准ら
 ぶるにもあらず。又かみつ世よりの歌にもわたりていふにあ
 らず。たゞ近昔より、後、今の世に歌とする歌を、あまねく見るに
 この五つにもれたるのあし。これをよく見しりて、古き歌を
 心うるにも、まづ何のかたと思ひ定むれば、心をとく事もやす
 く、又みづからのよまんためにも、歌の体たゞこれにあること
 をまりて、思ひめぐらさば、よみかねて、魂あくがれのみゆく事
 をやめつべし。一つにこのばへ歌、二つにこのよせ歌、三つにこの
 かへ歌、四つにこのまもらへ歌、五つにこのかさね歌あり。これらの
 うちに、のばへ歌のほかには、ひと歌に、二体三体を備へてよめ

るもあり、只大むねをとりて五体とす。

あぐべきかたかぎりあるまじければ、中頃より今の世までの
 歌の、その体と心得やすきをのみ擧ぐ。

大よそ五体の姿古へもかくのみぞある内に、上つ世にこのかさ
 ね歌のみえす。中昔にこのあろくくみえたれど、たゞよみ合せた
 るやうのみあり。中頃にこの此体のおやとすべきもみえたれど、
 のちくくのやうに、むねとせる事のみえす。歌もいたくすくあ
 くぞあるを、近昔の時より、すくれて好みよみける人多く見え
 たり。かさねるやうも、中頃あまにこの見えぬ詞づかひあま出さ
 たり。此一体の、近昔を初めとすべし。

○一つにこのばへ歌

歌擧げまめすに及ばず。今四かたをよく見知りて、それらには
 つれたるを、皆のばへ歌ありと知るへし。貫之の六くさにあ

かてる歌ども今此一かたのうちに入るべし。見聞く事をいひ思ふ事をもいひものにも喩へ人にもよみかく。皆のばへ歌あり。みづから百首あまよまんにのばへ歌多からん事を願ひて四体がちあらん事をきらふ。のばへ歌の歌源にして古へに近けれのあり。いひもてゆけり。今四かたも皆心ののへ歌あるを体をかりてよみいだせるとおいらかにいひたるが違へるのみあり。さる故に四体に二かた三かたを擧げたれど。のばへ歌のさる事あり。いづれの体ものへ歌あらずといふ事あけれのあり。

古袖ひちてむすひし水のほれるを春たつけふのさやさくらん 貫之
同 一つほりのあき世ありせいのほかり人の言のは嬉しからまし 讀人あらず

○二つにのよせ歌よせたる歌、そへたる歌あれど、
たしなへてよせ歌といふあり。

詞のよせあるにすがりてよみあせるをいふ。上つ世にもすく

あからず。そがうちに冠詞といふもの、みなよせたる詞あり。但今の歌に古のかうふりことばありとて、よせ歌といふさだめす。中むかしより後のひねとよみたる体あり。

俊頼口傳に、夏引の糸ども、さゝがにの糸ども、思ひよりあり、思ひたゆども、かきたゆども、くるにつけてども、くりかへしども、心ばそしども、又心あがしども、思ひみだるども、我手にかへ、まづはたにかけてども、折ふしに、またがひていひ流しつれの、自づから歌めきぬるものあり。又、柚山ども、柚川ども、とりかへりぬれり、この暮ども、夕ぐれども、日のくれかたにども、おつるいかなの過、やらすども、又、うみのふねあまにとりかへりぬれり、つゝさひ多かる物ぞかし、さといへり。又、清輔初學抄に、秀句とて、此類を多くあけて、歌の物によせてそへよむやうあり。あすらへ歌といふものにやといへり。かく先達の沙汰しかかれ

たるを今思へり此よせうたの事ありけり。
 又源氏物語に大宮のふたかたにいひもてゆけり玉くしげ我
 身はちれぬかけこありけりよませ給へるを君見給ひてい
 たく玉くしげにまつされたりと笑はせ給へるを思へばつく
 りごとされど歌のをしへありよせ歌とてあまりに縁を尋ね
 がちあるの作りものやうにてあしきあり。歌の心を先きしてよむへ
 かつらに求めずし心にもあらぬ方につけ行なき有まじき事なり。さなれば詞の縁をあた
 つ世にありて詞にわかしきふしを好みいたくまつはれたる歌はほし。さりとて詮う
 すきの歌にもあらずよきはを思ふへし。これをのがるへき
 やうこそあれ。

よせ歌にのちあらずよせくさあり。これに本あり末あるもわ
 り。又よするやうにもよする詞ありよせかくる詞あり。そへよ
 む詞あり。これらをよく心得て興ありてよみおせるをよきよ
 せ歌とす。但これらをみな備へずしてのあしといふにのあ

らすよせ歌よみかかへんとするに我あからちとやらんまつ
 はれかちあるやうにてゆはひかあらぬをさりとてよせ所を
 捨て見れりいたくやつれて見ゆるをいかあるよしそと思
 りん時にこれを思ひて見もわたし。又よみもおほすへきあり。
 よせくさどのさきの俊頼君のいひけん。袖やまうみのふねお
 とをいふ。此君の心の全く戀の歌さどの心をたていへり。今
 の花ほどぎすにも詞心よりくれりやがて其題にもよする
 あり。四季にも戀にも寄山寄河さど題あるの更あり。さあらず
 も月雪さといふ題ありともやがて詞のよせくさどせばやど
 思ひたらんもの皆よせくさあり。さて本末のありあし歌に
 よるへし。月どのみよするに風情たらねばよしあき更科姥捨
 山さどまでをよするの末あり。同じくそのもの縁より出た
 れど又寄すへきくさどあれる物の本に對へて末といふへし。

よする詞と云、その事この事全くおかしけれ引たがへて
 よみずをいふ。たとへば牛を愛しといふが如し。よみよするよ、てに
 くいむし。後の世に、假字乱れて、定めあへぬまゝによみかけたる、心のたもきかたに文字をか
 くさといふ事、全くあやまれり。横千に宣子、露分てやこかり衣いそけとも里の十市の野への夕
 くれ、遊さよせたるおめり。遊の古のまほ、今のまほ、十のまをまれば、いつれよもかよひたし、
 かる離歌あぐるにいとまあらず。たゞし古の歌、中頃までといさゝかたがへるを見す。そのよ
 し四具の下にのす。近昔よりそかくまげなき事ある。

よせかくると云、半をとり入れてよむ也。はしたあしと云事
 を、身のはし藤のとよみ、さらぬと云を、さら雲、さら波と云いふ
 類也。よせかくるといふ、すちあきらかなるを言す。横古に中務卿親王、けふも又人もさほでや
 紅の濃染の梅の花のさかりな、みはてやくれなむさか、れるたぐひあり、又後拾に和泉式
 部、かへるまをまぢ心見よかくなからよした、にて山しなの里、千五百番歌合に、顯昭此歌を引
 て、保季朝臣、つれなき猫かはらてや山しかのたさはの山の音にたつらんといふ歌を、いはれぬ
 へきにやま難したり。いれむれの明あるとあきらかからざるなり。

そへよむ詞と云、それにもいふへくこれにもいふへくして、詞
 も心もたかはぬをかりてよむあり。霞に寄せてこむる詞、へだ
 のる露によせて、かくむすぶあまよむ事あり。遺拾愚神に、かくまますい
 つれの山しすみかれし宿

をばすての月のたひれい、此歌の古今に遺翠、かくれぬの下より生るれぬのはのれぬなつたてじ
 くるないさひそ、れぬあつたてしといへる、そへ詞なり。又くるないさひそといへる、よせ詞な
 り。よくみまり
 てわかつへし。かくさまゝあるを心得てよまべ、いかに多くよみ
 入れたりと、かの玉くしけのもどきの負ふまじきあり。赤染
 が歌に、

拾後 津の國のこやとも人を云へきに隙こそあけれ葦の八重葺

戀の心に、人の心をつくしてうらむるがわりあさに、今の我も
 何の心もあければ、よき折だにあらぬ、こよとああいせまほし
 きに、月日経てさる折あければ、思ひながらあひがたきよしを
 よまんとて、津の國のこやとどりかゝれる、寄せくさのもど
 あり。それに、芦の八重ぶきをよめる、未なり。さてこやのよせ
 たる詞、ひまあきのそへてよめる詞也。かく興ありて、よせ歌の
 よむへきあり。
 わらはして寄せ又そふるやうあり。多くのはじめによせて、後

に顯はすあり。たま／＼はじめあらはして、後に寄するもあり。
 九とへのさわぐ入江の白波のまらずや人をとよめる。いはじ
 めによせて後に顯はせり。足引の山路もまらずまらかしのと
 よめる。初にあらとして後に寄せたり。初寄後顯の常あり。初
 顯後寄のうちふるまひたるさま、でにくげあけれの、好みよ
 むへからず。
 俗に序歌といひつけたるもの、みな寄歌なり。常のよせ歌にむ
 かへて、うち寄といひ、うちそへといふ。

寄歌

古 芳野川いはさりとほし行水の早くそ人を思ひそめてし 讀人不知
 同 立別れいなはの山の峰に生るまつとし聞かひ今歸來ん 行 平
 金 菖蒲草よどのに生る物きれねあから人の引にや有覽 公 實
 寄せて對へたる歌

古 明たてバ蟬のをりはへ鳴暮し夜の螢のもえこそ渡れ 讀人不知

拾 春の田を人に任せて我の唯花に心をつくるありけり 齋宮内侍

寄せて重ねたる歌

新 宿もが赤佐野の渡りのさのみやの濡ても行ん春雨の頃 源家長朝臣

万 苦シシモ降來ル雨カ三輪ガサキ佐野ノワタリニ宿モアラナクニ

白川殿 行春も夜のこえじと泊らあん暮る、籬の山吹の花 爲 家

古 夕暮ノマガキハ山ト見エナ、シヨルハ越エシトヤドリトルベシ

寄せてまもらへたる歌

拾 夏の夜の浦嶋の子が匣されや果あく明て悔しかる覽 中 務

雜人輪浦島子ノ條ニ見ユ

五百首 梓弓春の雉子をえてだにも人の心にいる由もがあ 基 良

春ノ部雜ノ下ニ委シ

寄せて重ね、又まもらへたる歌

拾 薪こる事の昨日に盡にしをいざ斧の柄に此に腐さん 道綱母

法華經ヲ我得シ事ハ薪コリナツミ水汲ミツカヘテグエシ行基
斧柄ヲ爛セシ事雜器材斧ノ條ニ委シ

同 徒人のぬれぬ例も盃の底にかくへき之にこそ有けれ

徒人ノ渡レトスレヌ縁シアレバ又逢坂ノ關ハコエナン
伊勢物語
連歌

盃ノコトト同部盃ノ下ニ見ユ

寄せて對へ又まもらへたる歌

金 無跡に懸ける太刀も有物をさや柄の間も忘れ果へき 俊 頼

繫劍コト雜器材劍ノ條ニ委シ

拾 鹿を指て馬と云人有ければかをもぞしと思ふ成へし 仲 文

はしかきに、能宣のもこへ、車のかもなかりにつかはしけるに、かきりけれはき有、
カモハ鹿ナリ鹿ヲ馬ト云事雜馬ノ條ニ委シ

附言

此体をよくまんに心得六つあり。
一にハ歌ニ此体をおもむ人あり。さのみくせのやうにありぬれハ、うるまきも
のぞり。

二にハあまりに縁を尋ねずこしまつはれたるハ、つくりもの、やうにてわろし。まら糸のうら
はへてくるよるなままでいさる事にて、あまりよ入たち、水のわくにそななくさりつ、けたる
ハ、にくけそふさかや。赤染が八重ふきまよめる風情、珍しく詞姿もやさしき、公任卿もなのめ
ならずほめられたり。されども、やとも人をさへるが、おごやらんにくげに聞かせいへり。
又なしからぬみやまれのしのさ鑑になにさ命の幾夜ひとりねとよみたる、かへすくをかし
くあまましとあり。これらハひさぶしのくさり、けしうもあらぬに、心のりて猶ひとくさりを
求むるゆゑに、かゝるひがことあり。常に我心を詞をなてらして、文字をすうべきなり。

三にハ人の秀句をさる事、
春がすみ立田の山、 久かたの月のかつら、 君が代にあふさかやま、
立別いふいのやま、 あつさ弓おして春、 千はやふる神代、
なき名のみたつの市、

なまやうに、詞のはやくよりさりなれたるハ、二句つゝきたりとも憚がらす。近頃の歌の、秀句
を證としてよめるハ、二文字三文字にてもさるが、あしきなり。これをさる時ハ、その歌も耳な
れ、今のうたもたし、しからぬゆゑなり。雅經卿のあくれもよはのさよめるを、壬生二品ハ
露のぬきよはの嵐とさり、有家卿の末の松やます、こころよよめるを、雅經卿のあし引のや
ます心にかゝりてもさされるを、御抄にも難しむがせ給へり。

四にハふつき事たかひたる事を、あしくひきよするハ、おほきなる難かり。
晴のあははしめて秋のなちえ、 山ざりのなのまたり柳、
さやけき月のかけま、 かつらぎの山ちなうちのはしひめ、
かうやうにもはなれたる物を、あはせつゝくるあしきなり。これもまやうによりて、又よく

ときこゆるあり。
五よの知らぬを、白雲白雲にやすへくして、知る知らぬのやすへくす。見んを御津三宮に
よすへくして、水筆にやすへくしてにはたかふゆるるし。

六に假字のゆくへも知らざる人、心のたもきかたに文字をかくふ事といふ事。

ささの十市の野邊の夕ぐれ、

みれらのあやまりすくなくらす、上つ世より中頃まで、かんなつひ定りたれ、かゝるあや
まらふし。近き世より亂れて定めあへぬまゝに、かゝるひか事あり。今の則にまたかふ人も、心
まらひあるへき事なり。

〇三つに對へ歌

白きものをいはんとて、黒き物をひきてたくらべ、長さこと
をよまんとして、みじかさ事をうちあはするあり。これたゞの
ばへ歌のうちに入るへきやうあれども、詞の上にてかりよみ
たる姿あるもあれ、一体とせり。まかのみをらす。ふかき淵と
いはんとて、まづ淺き瀬よりよみかゝり、夜道行くことをいふ
に、月もかくれぬよしなどをよめるも、みさむかへ歌あり。又い

づれをあるじ、いづれをまら人とかけれど、むかへてよめるも
あり。

袋草子に、長房卿自讃せられける秀歌三首を出せるを見るに、

朝まだき八重咲菊を九重に見つる、霜の置べ也けり

月影の山の端いつる、霧よりも更行空を照まさりけり

年を経てかつらの葵變らずも、今日の挿頭の珍しき哉

これみさむかへ歌也。その頃の作者、すでに心をよせたる姿を
る事見るへし。

この体のうちに、ねがひうたとして一体あり。ねがひの心あるの
みさむかふる心われのあり。たゞし只あつらへたるにあらず。
目の前にさあらぬ事、またあるまじき事を、思ひよせてねがふ
たくひあり。たとへ、世の中にたえてさくらのとよめるの、う
ち見ての對へたるやうあらねど、さくらさき世とむかへてい

よの中に云々の
歌古今一巻に出
たる在原業平朝
臣の歌なり

へり。いつはりのさき世ありせばも同じ。是のさきとめて見知り
 がたき故に、常にのねがひ歌をも、のばへ歌に入るゝあり。され
 と此心のさゝおくへし。對歌を心うるたすけとあれのあり。
 此体を昔より、後のいよく多くありぬ。五体のうちにていど
 く見つくる事難き体あり。心を用ふへし。

ひかへ歌

明たてば蟬のをりとへ鳴くらし夜の螢の燃こそ渡れ 諸人不知

恨みわび扱も命のある物をうさに堪ぬの涙ありけり 道 因

對へて重ねたる歌

袖の香の花桶にかへりさぬ儂見せようたゝねのゆめ 爲 子

五月ヤミ花桶ノカヲカケハ昔ノ人ノ袖ノ香ヲスル

高砂の尾上の鹿のさかぬ日も積りはてぬる松の白雪 家 隆

秋風ノウツヤ吹毎ニ高砂ノ尾上ノ鹿ノ鳴ヌ日ツナキ

恨みわびの歌千載
 集戀三に出たり

袖の香ハ云々新
 千載夏部に出た
 る歌也

高砂の云々三三二
 集の歌なり三三二
 集ハ三生二品家
 隆卿の集也

ひかへてまもらへたる歌

淺茅生の宿の使の歸るさを雲井の月に擬へてと待つ

源氏桐壺ニ更衣ナクナリ給ヒシトキ帝ヨリ初賀ノ命給テ使ニテ更衣ノ母上ニ文ヲ
 送りタマヒ其返事ヲ夜フケルマテ待給フ事アリ

尋ねべき友こそかけれ山陰や雪と月とを獨見れども 俊 成

山陰ノ事時節雪ノ條ニ委シ

ひかへてかさね又まもらへたる歌

待ちえしと思ふ夕もどふ人の袖の色あるまら菊の花

古 花見ツト人待時ハ白妙ノ袖カトノミゾ過タレケル

袖ノ色ナル白南ト云コト時節菊ノ條ニ委シ

〇四つにのまもらへ歌

古事本説にすがりてよむあり。古事の我國の事も、人の國の事
 もよむへし。よせ歌にまざるゝもあり。よきたすへし。歌の上
 のみをとりて、其事にかゝはらぬの、いかばかり深くよみ入れ

たつねへき云々
 續古今冬部に出
 たる歌也

たりども、かさね歌あるへし。又詞いたよらせども、其事を思ひてよまばまもらへ歌あり。又作物語の事をよむことも、まもらへ歌なるへし。

まもらへ歌

戀佐ぬちぬの丈夫成あくに生田の川に身をや投まし 通 經

淳沼ノ壯士ノ事名所生田川ノ條ニ委シ

昔我あつめし物を思ひ出てみかれかほにもくる筈哉 季 通

栗盛ノ事時節盛ノ條ニ委シ

まもらへて、重ねたる歌

庵草 夢にだに見えぞといかで告遣んうつの山路の逢人もあし

伊勢物語ノ故事名所宇津山ノ條ニ委シ

附言

古事本歌ハ、ふべて人のまれるを用ふへし。まる人まれば、無下にかひなし。たしよくその事をまらる、やうによみ入るへし。

○五つにの重ね歌

戀わひの云々千載集戀二に載せたる歌あり
昔わかの歌同集夏部よ出たり

本文本歌あるひの詩の心を思ひ、又の詞をとりてよむあり。御抄に古歌をとる事、是第一の大事にて、上手ことに見ゆる事なり。とまるとさせ給へり。但初心の人、詞をとるの皆重歌と心得るのあやまれり。かさねるにのやうあり。四五字をとりても、あらとにその心とみゆるのよし。たとひもとをとり、末をおかしたるとも、その歌ども見えぬあるへし。それの歌ぬすみたるといふのみにて、かさね歌にあらず。この体、あらはに、その本歌をとまるとさやうに、よみすぐるをよしとす。なごつよの事なれど、宗良親王信太の杜千首のうら、かなから

よき歌さて、六首いたされたるをみれば、昔の歌なり。その世に、何となくよみ人の心を傾け、ん事思ふへし。

口傳奥義に、昔の歌をとれるやうとていだされたるの、重歌に似たれど、猶今のかさね歌の趣にのあらず。点化秘術に、かさね歌のはじめとて、すこし出すのみぞある。さあらでも、古歌に古歌のかよひたるの、多くゆとよみよりたるもあり。又その体

を思ひてよみたるへけれど、近昔より後のかさね歌をあらぬ
よしの点化にくらし。

此体の、ひとつふたつの歌をあけて、いひつくすへきにあらず。
別に近昔以後の歌をあつめて、点化秘術とあつけたるもの有
を見るへし。

此体上の世に、見えぬ事あれにや。殊におもりにあ
ぬやうあれど、歌の心昔より至らぬくまきくよみつくりたる
後にいできて、興ありたけも高く、一かたにつくすまじき心を
もよみはつへきの此体あるへし。さるゆゑにや。近昔より後今
の世まで、歌のむねとある人の、殊に心を用ひて、ふしある歌と
も見えたり、今一つ二つをいひ、

月まつとの歌新
拾遺歌上にてせ
たり

月待つと人へのいひし偽も今やまことのゆる暮の空 家 隆
あはれこしかたに、夕ぐれに人待つとて、何となく心けさう

して、見出しおどしてあるさまのたいさならぬ、答むる人のあ
りて、何事かあるかと、思ふに、忍ぶる事あれ、人侍どのいはず、
やがて夕ぐれの空にかこちて、月のいづるをまつぞといひあ
して、ありけるも、いつしか人のつれあくのみありまさりて、た
まさかに夕ぐれをも契らぬ、せめてのさぐさめに、暮毎に月
をだにまち出で、ひとりねの慰めにもせんとて、おがめいたし
てをりつゝ、思ひやれの、そのよに人待ちける事を月にいひあ
しつゝ、いつはりの、今のまことにありけるか、思ひかけぬよと
いふ心あり、かゝる心を思ひ得たりとも、かさね歌あらずとい
かいひとてん。よしからくしてよみまとりたりとも、此歌は
かりたけもあり余情もつよく、あそれにはさへきこぬん事、い
かいらあらん。さて此歌の心の、人丸の、

万 足引の山より出る月待つと人への言て君をこそ待つて

とよめる歌あるにすがりてよむゆゑに、やすらかにきこえたり。かくよめば、一うたの中に、人丸の人の心をつくしいひて、又わが歌をもつゞけよみて、心をあかすあり。たゞしあしくとりて、人丸の本歌ともきこえす。此うたの心も、何とも心得らるまじ。月待つと人はいひてといへるを、そのまゝに人はいひし偽とよめるにて、理たしかあり。かさね歌の、本歌の老るきをよしとすとい、このよしをいふあり。又古に、

名取川の歌古今集三によみ人まらすきてのせたり

名取川瀬々の埋木願ればいかにせんとか逢見初けん
これをかさねて、定家卿、

思へ人の歌増抄三に載たり

名取川いかにせんとかまだ知らず思へ人の恨つる哉
いまだあひみぬはど、一すぢに戀しくていひあやむを、人につれあきて、とかく遁れつゝ逢期あきを、世に恨めしくのみ思ひつるが、まことにあひ見て後、あらはれて名たゞば、我も人もい

かゝせん。戀しどのみ思ふまゝに、未かゝる事ありとまでもたどらずして恨みける事よ。今思へば、人もさる心づかひにてや、つれあかりけん。我恨みける心淺かりけりと思ひ知るあり。これもさる本歌をからすのよみとつまじき心あり。

井蛙抄又増し加へて、六つのやうを擧げられたり。されど其第三と、第四の心殊にたがはねば、只ひとつあるへし。又御抄に、古歌をとる二つのやうを記させたまへり。これかれをあはせ見るに、ふたつのあまりに事をぎたり。六つの又よくわかれても見えず。

歌袋終

去らべの直路

佐々木弘綱校
同 信綱

歌のうたふにてことわるものあらねば、調をもとへすへき事
論さく、その去らへんのしもひとへの真心より出て、ひとり天賦
に成るの道あれ、毫末も私を容れかたきものあり。され、歌
よむ人の先うたふとことわるとのけぢめをわきまへず、あ
るべからず。かつくその事をいふへし。
旅人の宿りせん野に霜ふらの我子はく、め天のたづむら
この下句殊にめでたく、嘆聲のひいさあまりありて聞ゆるを、
もし理をむねとして、天のむら鶴我子はく、めさといのんに
い、何の聞くへきふしあらん。群鶴をたづむらとうたへる、即天

去らへの直路

一

花のちる云々古
今集春下藤原俊
陸の歌也

山城の云々拾遺
集雜に初句たこ
にきくさあり三
位國草の歌なり

戀しとい云々古
今集戀四落原深
養父の歌也

賦のまらへにして、理外に出たるものあり。また、
あかねさす紫野ゆきまめのゆき野守の見すや君が袖ふる
此下の句を例のことわりて、君が袖ふる野守の見すやといは
んに、更にうたふへきふしあらむや。
花のちる事やわひしき春がすみ立田の山のうくひすの聲
この立田の山に鶯のさくといふへきを例のことわりを忘れ
てうたへるものあり。
山城のこまのわたりの瓜つくりとありかくありある心哉
このつくりうりといはでりことわりたしるけとも、さうい
す。
戀しといたか名付けん事あらんまぬと直にいふへかりける
このたの名づけるとか、名けつたるとかいふへきをさうい
はす。

來と来ての土佐
日記に出たる歌
にて實之かよめ
る也

秋の野の云々古
今秋上の歌にて
よみ人知らすこ
あり

石上の云々古
今集に云々古
維上よみ人知ら
すこあり

なごめら云々
もさ万葉集に出
たる歌なるを拾
遺集維新に下句
久しき代より思
ひそめてき柿本
人丸さて載せた
り

來と来ての河の堀江の水をあさみ舟も我身もあづむ今日哉
このほり江の川といふ例あれども、このつとさうい
れぬ天賦の調あり。
秋の野の霞こそ殊に寒からし草むらととに出のわぶれ
この虫のわぶるのさと云へきを、さういはず。
石の上ふるから小野のものがしは本の心の忘れなくに
小野の古幹柏と云意あるを、たい調をと、のへん爲に、まかい
ひつとけたるも、天賦の外あきあり。
少女らが袖ふる山のみづ垣のひさしき時ゆ思ひきわれの
この袖ふる山も、石上のふる山あるを、袖ふるといひかけたる、
又例のまらへのみあり。さて後の撰者、此下の句を、久しき代よ
り思ひそめてきと引直されたるの、中々に調子うきていか
なり。

妹があたり見つゝをらん伊駒山雲を柳引雨のふるとも
新古今戀五に句
句君があたり四
句世にかくして
さてのせたり

春來れい云々拾
遺集春に出たる
三生忠見の歌也

白河の云々詞花
集春に出たる源
傍頼の歌也
わかの浦云々
古今雜中に載た
る山邊赤人の歌
ふり

妹があたり見つゝをらん伊駒山雲を柳引雨のふるとも
これも後に君があたり云々雲をかくしを云々として出され
たり。さゝりさて此いこま山をひがし山とか伏見山とかいはん
にいたどひ事實によるども更に哥きらんや。
春來れの先ぞ打見る石の上めづらしげあき山田あれども
これもいそのかみの地名一首のいのもいふへく調のひ
いさ妙あるものあり。

白河の春のこすゑを見渡せの松こそ花のたえまありけれ
若の浦に湖みち來れの瀉をなみ葦邊をさしてたづ鳴渡る
この地名も白河わかか浦にかざりて成れる調あり。なほ山科
の音羽の山岩田の小野あとも山まろのといはんには雲泥の
たかひありてまらへをささるやこまかにあぢはひて見る
へし。

春のよの云々古
今春上に出たる
大凡河内躬恒の
歌也

下紅葉云々新古
今秋下藤原家隆
の歌なり

君が代いつきじとそおもふ神風や御裳裾河のすまん限の
拾遺賀長部卿經
信の歌也

咲さかす云々拾
遺集よみ人知ら
ずさふり

空蟬の云々古今
哀傷僧都勝延の
歌也

春の夜の闇のあやなし梅の花色こそ見えね香や隠るゝ
この下の句もし色の見えねと香こそかくれねあといひ又
下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のあくらむ
とあるをぬれてや鹿のといはんにはいづれも調たしるくに
いたるへし。

君が代いつきじとそおもふ神風や御裳裾河のすまん限の
此歌神風の冠辞歌のいのちありと師のいはれたりもしそを
取直してさくすいの五十鈴の河あといはんには理のみきこ
えて歌といふへからずさて又拾遺集に
咲さかすよそにても見む山さくら峯の白雲立あかくしそ
とある下の句の調いかにぞや思へりしにかの
うつ蟬のからを見つゝもあぐさめつ深草の山煙だに立て
と云歌の下の句一本にけふりだにたて深草の山とあるよし

をさくにつけて思ふに、前の歌もたちあかくしそみねのまら
雲とわらむに例の歎音のひびき出来て、天賦のまらへにか
きひぬべくや。もとのまゝにて、理のみきこえて、歎聲のひび
きあし。

駒とめて云々新
古今冬藤原定家
の歌也

駒とめて袖打はらふかげもあしさを、わたりの雪の夕暮
この歌を縣居翁の評して、此歌うち誦じて見るに、あはれある
風致あく、かの佐野のわたりに家もあらくにといふ本歌と
い、雲泥のたかひありといされたる、まことにさることあるへ
し。袖うちはらふかげもあしといへるに、雪中のくるしささま
いあくまでこもりていあれども、そのことわれるのみにて、一
首の調、かの本歌とい同日にいふべからず、又近頃京あるあに
がしき歌に、

大堰川月と花どのおほる夜にひとり霞まぬ涙のかどかな

このかの、あたら夜の月と花とを同じく、い心知れらん人に見
せばやといへるによりてものせしあるを、二三の句より語勢
はやまりて、何とかや今やうの小唄の調子めきたり。このまた
く凡調ありと師のいはれたり。又江戸人の歌に、よと、もに棹
さすかたにあがれの、とむればよとむ水の月かげといへる
い、むげに俗調あり。この、よもすがら月にうかれてこぐ舟のあ
けゆく空や泊あるらんあといさ、や、歌めくへじといされ、
また朝なく、かすみに消ゆと見し山の雪、い今日こそこのら
さりけれといへるを、この二三の句つふ、とことわりたる、
更に歌あらずとて、朝あ、霞に消えし山の端の雪、い今日こ
そのこらさりけれと取直されたる、すべてその論動くまじく、
まどに雅調俗調のけぢめいちじるきものあり。さて近頃の歌
集を見るに、辞格もたがはず、趣向もいと巧にかもしろく聞え

音から、うち誦してみるに、わづかある調のたしろきより、聲の
 ひいき消えて、おはれといふばかりの風致さきか多し。古今集
 の序に、歌とのみ思ひてそのさま知らぬあるへしとあるのさ
 るたぐひにてあるへき。され師の説に、世の中の歌よむ人、音
 調をさく事疎けれ、先よみ出る歌を文字に寫す。文字にうつ
 す時の目にて見る。目にて見る時の義理にわたる。義理に涉る
 時の聲の調を離る。調を離る、時の感哀さくして、歌の歌たる
 妙用を失ふ物也。然のみならず、強弱のわいためを去らされ、
 かの句をおきかへ、此句を抜きさりとするか故に、さて冠を
 戴きて、腹巻をし、沓をはき、或のわてやかある狩衣の下よ、やれ
 たる麻の袴をつけ、あるの句ひある指貫の上に、おえたる肩衣
 かけたらんやうにて、更に何とも分がたきにひとしかりぬべ
 し。云々、又音調の天地に根さして古今を貫き、四海にわたりにて

異類をすふる物あり。言語の世々に移り年々に音かれ、かつ貴
 賤とへだて都鄙と違ひて定則あり。ざるを後人、詞につぎて後
 調をいふ、本末をとりたがへたる物あり。云々、又歌の畢竟嗟
 歎の聲を云、せめてこれをいへば、阿といひ、耶と云も歌の外あ
 らす。いまた文義ありといへども、聞人の感ずる事、ひとへにそ
 の聲の調にあり。云々、おのづから出来る聲、同じ阿といひ、耶と
 云も、喜ひの聲のよるこひ、悲みの聲の悲み、他の耳にもわかる
 べを、姑く調といふ。感應の専ら此音調にあるものあり。云々、
 この去らべの本原をいはれたるにて、語調の去らへとの異あ
 り。又師の隨筆の中に、かしくも我水穂の國の、水土清潔にし
 て、其食や潔、その聲や清、これ神の靈に感通して、或の幸はふい
 はれあり。是を崇めて言靈と云。その幸はふ聲に調べ成すを歌
 との云へり。云々、又歌の、いまだ道とすべからざる先の、性情幽

玄の境を飄ひ出るものあり。されの既に行ふ道の上より見れ
 の、其道に戻り、その理なきに似たりといへども、それかへりて
 自然の至理にして、神人の感動妙用ある所也。云々、また枕辞の
 調を整ふるの具あり。然るを冠辞といひて、たゞに詞に冠らす
 る爲に設くるものありと心得たがひて、遣ひあすこそおろか
 なれ。枕の枕たる妙用を忘らざるが故あり。古今の序より集中
 の枕、その數多しといへども、皆その調を得て徒あらぬを詠味
 すへし。云々、たとへん久かたの月といはんも、大空の月といは
 んもことわりの同じけれど、必大空のといひ、久方のといはで
 の調と、のはさる所ありとあるへし。云々、なといはれたり。さ
 て折ふしにつけつゝ、うめき出るに、強弱緩急、大小長短さま
 ざまにて、それ皆天賦の外なげれり、私に用意すへきやうかけ
 れど、後にをえらびて品をわかつにいたりて、高調にまぐ

事あくて、古歌の秀逸といふもの、大方喉音の字の多きものあ
 り。後の代の俗調の、多く齒音の字おほくて、吟するにもその聲
 細くせまりて、たけ低きものあり。うたふに、喉音の多き歌調
 高く心ゆくものあり。くはしく、本編千代の古道に云へり。さ
 てある人、近世歌學ひらけて、歌道おとろへたりといへるの、ま
 ことにさる事にて、何れも究理の上のみ開けて、古に及ばさ
 る事いふも更也。歌の殊に幽玄の道なれり、まろらもそのさか
 ひに入る事あたはず。おほくの理路にまよひて、固有の活物を
 失ふに至る。遺恨の限といふへし。されのせめて志をだにい
 んとて、かくの物しつるあり。

桃岡 知紀識

附録

或辞格先生前の説を難してとかく云けるを、おのれ辨じて云、
 調といふものゝ歌のみならず、常の言語、又物の名など呼ぶに
 も、必なくて叶とぬ物あり。その白雲、白雪、白鷺、白鷺、白鷺、白鷺と
 云ひ、白妙、白犬、白兔、白兎、白兎、白兎と云やうのたぐひ、又進物の
 目錄など書に、御酒、御肴、御菓子、御書、御紙、御鶴、御鴨、御紙
 ちと、いはず。あるは干梅をウメボシ、切そばをツバキリ、ちと
 いひ、其外音便、ちと云もの、すべて天賦の調なり。又俳諧にも詞
 ありと見えたり。かのかれ枝に鳥のとまりけり、秋の暮といへ
 るを、もし二の句あるの文字を省きて、からすとまりけり、云々
 と云はん、に、更に感あるへからず。又趣向をつぶし、にこと
 わる事も、思ひと見えて、或初心の句に、水海のいりわく、や雪
 の朝といへるを、先生難して、ちかいひて、句に成らず、湖をま

ん中にして、雪の朝、かやうにいふもの也と示したりとか、是か
 の凡調歌を答むると同趣あり。又いかはかり、初心の人にて、も、
 夏風そふく、冬風そふく、赤菊の花、ちと、はいのぬをみれ、ちと、
 か、又調を、ちと、ざるに、いならず。され、い歌に、調あり、書畫に、氣韻
 あるは、花に、句ひあるか、如くにて、すへて、技藝の上、一切の器財
 に、至りても、形の外に出て、品位の妙所あるもの、みち、玄妙の堺
 に、して、これ、即第一義の道也、この道を、ちと、ざる限、い、おそる、
 に、たらずと、や、云へ、からん。

調の直路終

明治廿四年十二月三十日校畢

れくがき

この歌學全書はしも去年の十月れもひ
 れこして筆をとりそめこたびまたく十
 二卷の註釋をなしをへぬその十二卷は
 撰集九部家集十八部歌合三部百首三部
 歌論の書七部すべて四十部なり
 かく數多の書をわづかよ一年にあまり
 じ月日にて物じつる事古人のつばらに

老へたかれし書どものたまものといと
もく喜ばしうなん

又この書を世に出したるによむ人の數
いと多く四方の國々よいたらぬくまな
きは歌の道のいやさかえにさかえゆく
あるとははたいともくよろこむと
うかん

されどたゞ悲しきは我父の今年五月の

はトめつ方よりあつしき病にかゝりて
六月の二十五日に世をさりまゝつる事
おかんあはれかく十二卷の功を残へぬ
るを見給ひなはいかばかりよろこびた
まふらんと思ふまいとゞかなとさたへ
がたうこそ

此書の註さくは中頃に父君の事ありと
かバ其なげきにうちまぎれはた萬の事

身一つにひとをもてはら力を盡
 しがたく説きもらいつる事思ひ誤まり
 つる事もあるべし見ん人其心してよ
 この十二巻にもれたる歌學の書いと多
 かりその暇を得たらん折この書の續篇
 として其註釋を物すべし
 この書の標註校正を助けられしは佐藤
 球氏謄寫の勞を執られしは瀬之口重澄

土持綱安長沼成美の三氏なりこゝに氏
 名をかゝけて其いたづきを謝す

明治廿四年十二月三十日の朝

竹柏園の樓上にて

佐々木信綱識

参議爲相

これのみぞ

人の國より

つたはらで

神代をうけと

志き志まの道

明治廿四年十二月廿七日印刷
明治廿四年十二月廿八日出版

正價金廿五錢

編輯者兼

大橋新太郎

日本橋區本石町三丁目十六番地

印刷者

宮本敦

神田區小川町一番地



發兌元博文館

東京日本橋區本石町三丁目

工B-78

日本歌學全書發兌規定

日本歌學全書

全部拾貳卷
紙數五千頁

(一冊紙數四
百廿頁以上)

明治廿三年十月ヨリ毎月一冊發兌一ヶ年間ニテ全部完成ス

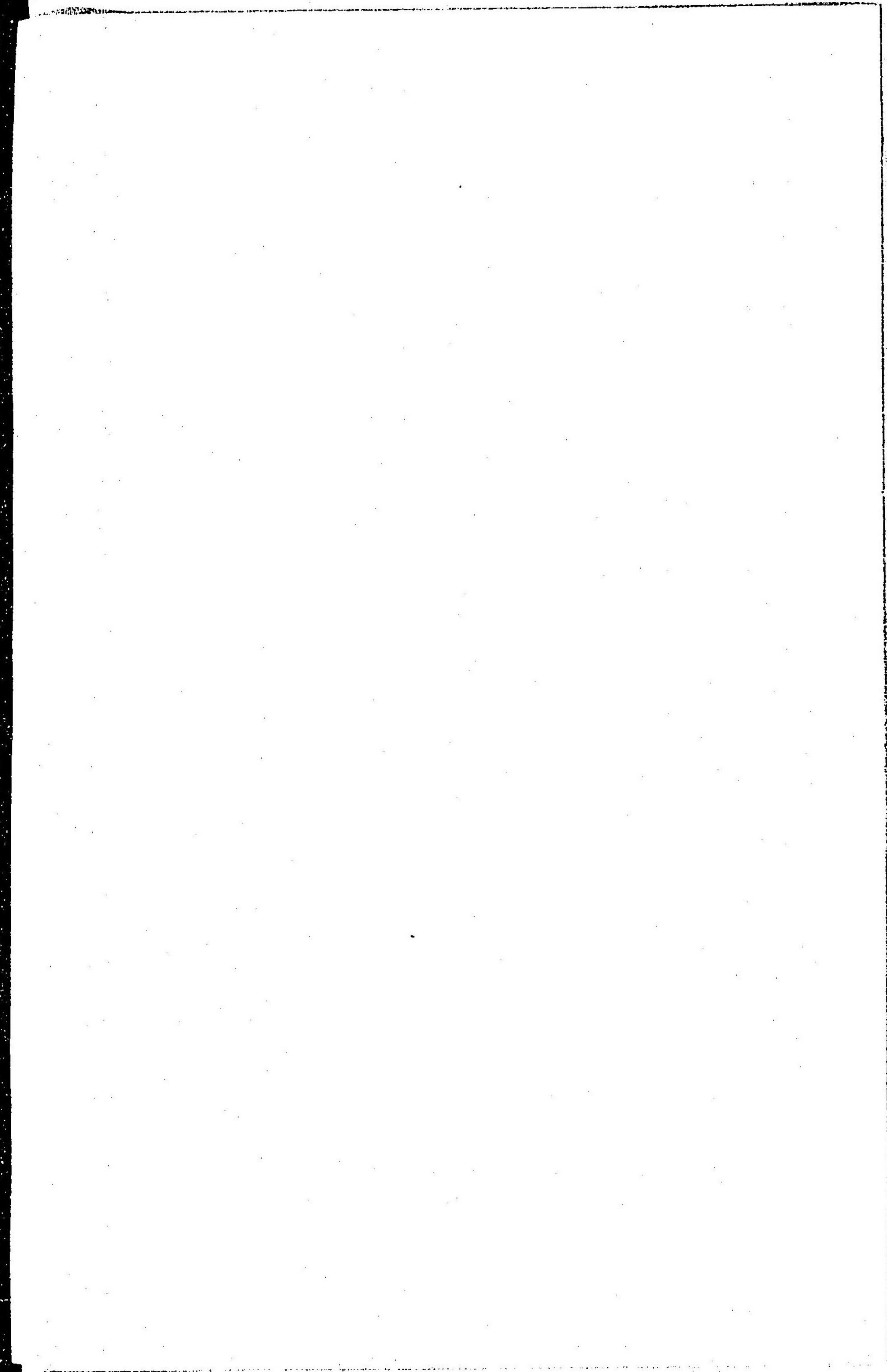
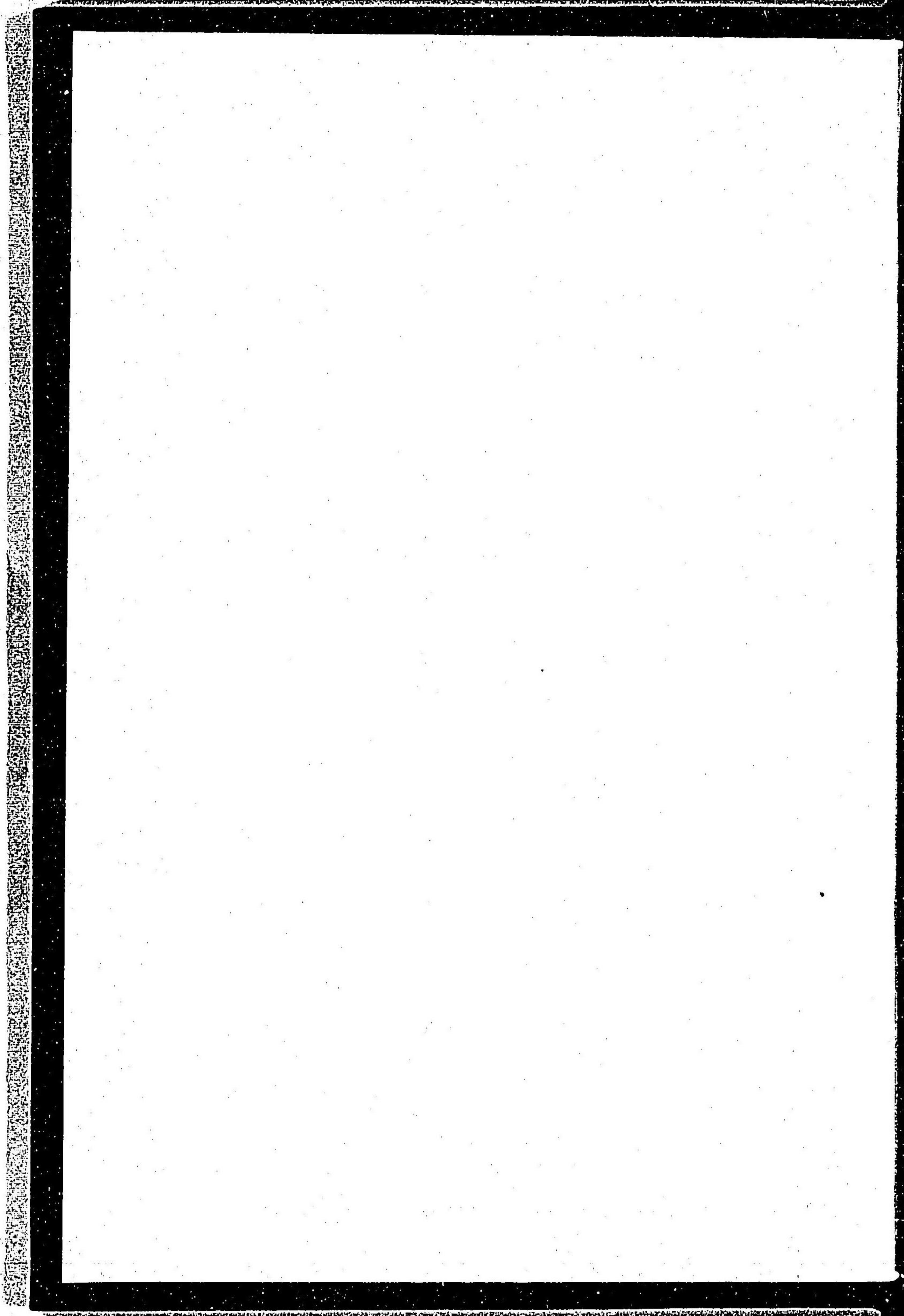
正價

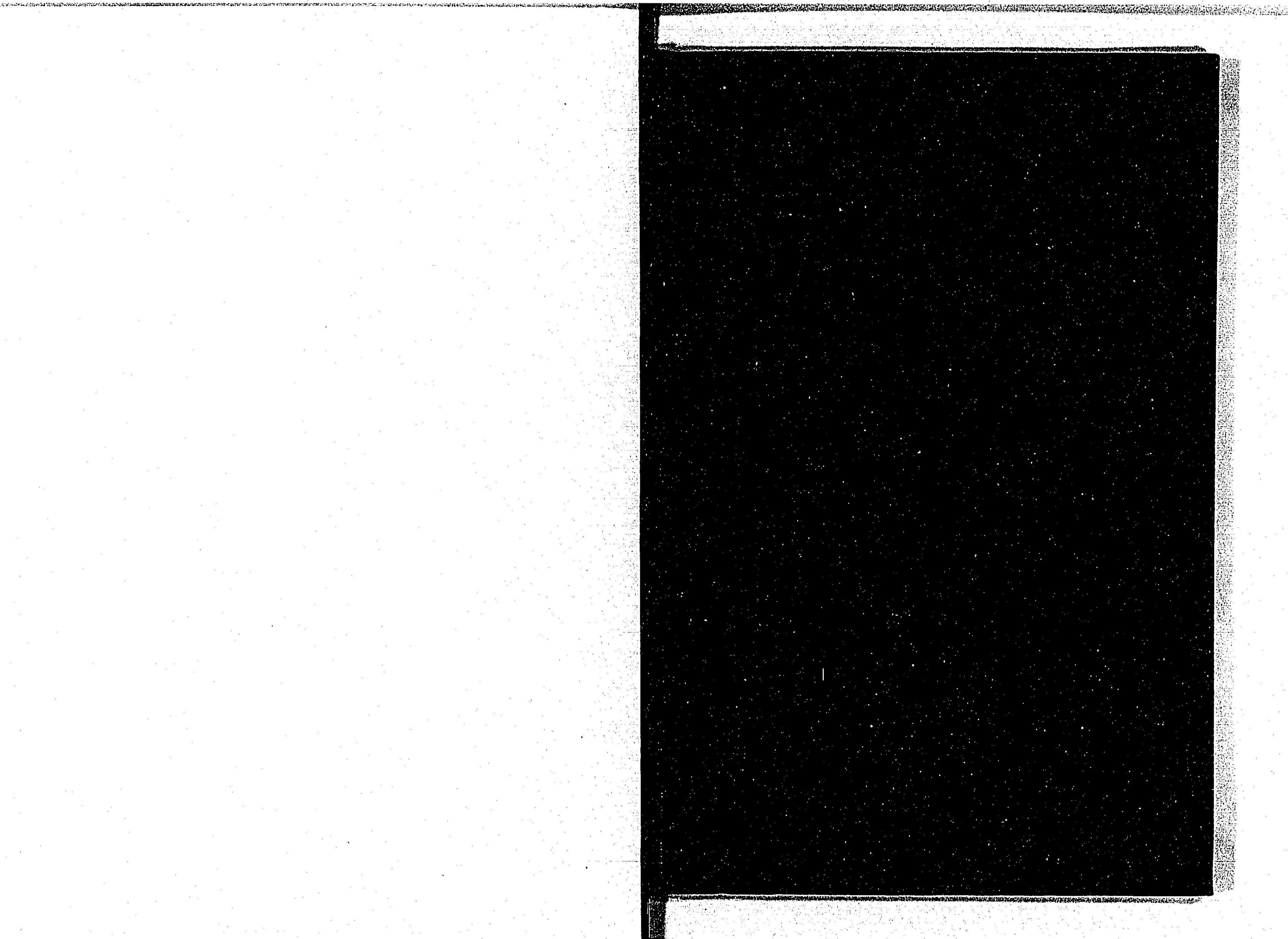
一冊金廿五錢 三冊前金七拾二錢 六冊前金壹圓卅五錢 十二冊前金貳圓五拾錢
●郵便稅一冊三錢宛 ●御注文ハ一切前金ヲ要ス ●郵
●假切手代用一割増 ●全部前金御注文ノ諸君ヘハ館友証ヲ呈ス

本書ハ每編讀切ナルヲ以テ分冊合本等ノ手數ナシ且ツ每編貴顯大家ノ題序ヲ附ス

總目次

- 第一編 古今集 貫之家集 躬恒家集 友則家集 忠岑家集
- 第二編 後撰集 元輔家集 能宣家集 順家集 天徳歌合
- 第三編 拾遺集 公任家集 紫式部家集 清少納言家集
- 第四編 後拾遺集 相摸家集 堀川百集 高陽院歌合
- 第五編 金葉集 詞華集 堀川百集 俊成卿家集 後京極攝政自歌合
- 第六編 永古百首 千載集 百人一首 實朝家集 後德大寺大臣家集
- 第七編 新古今集 賴政家集 萬葉集
- 第八編 西行家集 以下第十二編迄
- 第九編 以上各書目ノ外紙數ノ都合ニ依リ尙ホ書目ヲ増加スルコトアルベシ





911.108

N6852

S

M

